

審査の結果の要旨

論文提出者 韓 志晩

本論文は、「韓国高麗時代における禅宗寺院の伝来と展開」と題されたものである。

第1部では、中国で誕生した禅宗の寺院建築の成立を論じ、第2部、第3部では、韓国の統一新羅末から高麗時代（918-1392）において、中国から伝来した禅宗が韓国内でどのように発展し、どのような寺院建築が誕生したのか、実証的に明らかにしたものである。

第1部「中国における禅宗寺院の成立と展開」

第1章「唐代後期における初期禅宗寺院の成立」

第2章「宋代における禅宗寺院の伽藍配置特徴」

この二つの章では、中国における禅宗寺院の成立の経過と、その伽藍構成の特徴を明らかにした。唐代の禅僧らは寺院の内部の禅院で座禅修業を行っていた。位置は西側にある場合が多い。また厨房や寺務所の機能をもつ庫院は東側にあるのが一般的だった。独立した禅宗寺院は百丈懐海（749-814）によって創設された。百丈は禅宗特有の僧堂、方丈、法堂などを、生活規則である「清規」に従って一つの寺院に構成し、伽藍形式を成立させた。『五山十刹図』に収録された宋代五山寺院図からは、中心軸が仏の領域、僧堂・衆寮がある西側が修行の領域、庫院・行者堂がある東側が寺務の領域、という明快なゾーニング

を読むことが出来る。この起源は唐代の寺院に求められる。

第3章「寢堂に見る元代における禅宗寺院の変化」

第4章「宋・元代における禅宗寺院の僧堂」

第5章「宋・元代における禅宗寺院の衆寮」

この三つの章では、中国の寺院で、禅宗を特徴づける三種類の建築、寢堂、僧堂、衆寮を取り上げ、特に詳細に分析した。寢堂は方丈とともに住持の領域をつくり、法堂と方丈の間であって、住持の接客、儀礼の場として機能した。僧堂は座禅、食事、睡眠のための施設であり、最も重要な宗教生活の場であった。全員が集まる大きな一つの空間、聖僧像の安置、長連床の設置、などの特徴から、原型を唐代の食堂に求め、宋代の僧堂をその発展と見なす。衆寮は經典看読、喫茶、夜の食事用の施設で、洗濯、縫物、剃髪などの場も含まれていた。厳しい修行場である僧堂とセットとして、それを補完する施設であった。

第1部で明らかにされた中国禅宗寺院の実態は、後に韓国、日本に禅宗が移植されて、寺院が創設されたとき、その起源、規範として常に参照されるべきものであったのである。

第2部「高麗時代における禅宗寺院の成立」

第6章「統一新羅末・高麗初期における禅宗寺院の伝来」

第7章「高麗時代中・後期における禅宗寺院の内在的展開」

この二つの章では、韓国の統一新羅末～高麗時代におけるの禅宗寺院の実態を検討した。韓国の初期の禅宗寺院は九山派寺院と総称されるが、全てが山岳に立地し、また禅堂・禅室、法堂、方丈、祖師堂などの施設が確認され、唐代の百丈懷海の時代に通ずる内容が確認できるが、本格的なものではなかった。また、高麗時代中期、後期においても禅宗寺院の存在は確認できるが、中国の禅宗との交流が盛んであったことは確認できない。

第3部「高麗時代末における桧巖寺の復原研究」

第8章「序説」

第9章「復原研究1：正庁と東・西方丈」

第10章「復原研究2：僧堂・衆寮と伽藍配置」

この三つの章では、高麗時代末に拡張された桧巖寺を検討する。中国から韓国への禅宗の本格的な移植は懶翁（1320-76）によってなされた。桧巖寺は近年の発掘調査によって遺跡の全体像が明らかになり、その各建築の比定、伽藍全体の性格を確定させることが必要とされていた。本研究によって、中国の宋、元代の禅宗伽藍の実態が判明し、韓国にもそれとほぼ同じ建築群が実現したことが明らかとなった。大変に興味深いのは、方丈、僧堂、諸寮にはオンドルが仕込まれていることである。これは韓国特有の技術であって、中国の禅宗建築を韓国の建築文化に適応させたと言えることが出来る。

本論文は、まず中国における禅宗寺院の実態を明らかにして、次いで韓国における禅宗寺院が、中国からどのように輸入され、それがどのように実現していったのか、高麗時代を中心に実証的に明らかにした。生活規則を示した「清規」、宋代の寺院を具体的に描いた「五山十刹図」などの文献史料を全面的に用い、宗教内容を中心に据えて検討する禅宗建築史研究は、中国、韓国、日本を通じて、初めての先駆的研究といえよう。

東アジアにおける禅宗の伝播と、伽藍・建築の形態・実態を連続的に捉えようとした雄大な企画であって、見事に成功したというべきである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。